

文化四年・秋田藩の松前出兵

——外庄と藩制——

金森正也

はじめに

文化四（一八〇七）年五月、秋田藩は、箱館への出兵を命ずる箱館奉行の達しをうけ、六百余名におよぶ援軍を蝦夷地に派遣した。この事件は、寛政四（一七九二）年のラクスマンの根室来港に始まる、北方における外庄の展開と深く関り、また、それに対する幕府の海防政策の一端を構成する点で、重要な意義をもっていた。すなわち、すでに現実のものとなっていた津軽・南部両藩への蝦夷地出兵命令に続いて、会津・仙台の諸藩とともに、幕府の軍役動員の対象とされたのであった。

この事件は、幕府の海防政策あるいは対蝦夷地政策を構成するものとして位置づけられてはきたものの、出兵という事実自体が藩政あるいは地域社会におよぼす影響などについては、かならずしも具体的な検討が行われてきたわけではなかった。それは幕府の海防政策や対蝦夷地政策に関する研究が、多くの場合、国家史研究という巨視的な観点からなされる傾向をもつ限り、当然であったかもしれない。

しかし、この出兵の問題は、個別藩制史の観点にたってみても、外庄という対外的インパクトと、海防という国家的次元の政策が、藩という個別領主権に直接関ってくる問題であるという点で、重要な意味をもつ

ていると思われる。本稿では個別藩制史研究の視角から、外庄の問題を考察してみることの重要性を主張したのである。^②

いうまでもなく、この出兵令は、藩権力に対しても、武士や民衆に対しても、きわめて大きな衝撃を与えた。そのことは、例えば、この文化四・五年に集中して「松前御加勢記」と称する類の一件記録が残されている事実の端的に示されている。通常、藩制期における政治的記録の多くは、藩の公職にある者としての日記なのであるが、出兵に関するものの多くが、いわば一兵卒として関った藩士の私的な記録であるという点でも特徴的なのである。

本稿は、主にこれらの諸記録を手掛かりに秋田藩制史における、文化四年松前出兵の意義を考察する。その際、特に意をはらっておきたい点は、第一に、出兵とそれに関連する海防政策の実態を、具体的事実にくくして明らかにすること、^③第二に、藩の対応のありかたを、できるだけ幕府の海防政策との関りのなかで検討すること、の二点である。そのことによって、これまで不問にふされてきた秋田地方史の課題にこたえらるとともに、対外危機をむかえた幕藩制国家史の問題に、わずかの論点を供したいと思う。

一、文化四年「出兵」の実態

(1) 出兵経過の概要

ロシア人によるエトロフ騒擾のあった文化四年の五月二四日、蝦夷地への出兵を要請する箱館奉行の達書が、秋田藩に届いた。^⑥この急報に接して、藩主義和は、藩の重職をただちに登城させて協議する一方、領内各地の太身給人を久保田に召喚した。翌二五日、早くも第一陣の軍割を行って出兵させ、二六日には第二陣の軍割を完了し、さらに、久保田に召喚した戸村十太夫・佐竹左衛門両名の組下給人の領内配置を行った。^⑧

このように、緊急事態への対応としては意外なほどすみやかに軍割を終えているのは、おそらく、すでに動員が行われていた津軽・南部両藩の動向・情報をふまえてのことと考えられる。しかし、寛文九（一六六九）年のシャクシャイン蜂起以降、実際の軍事行動を想定した軍役動員が皆無であった藩および家臣団にとって、この出兵令は明らかに「火急の変事」であった。家臣団は、平時の状態から一転して、「一夜の内に従者を集め、質入の兵器を取り入る」というあわただしい状況にまきこまれた。^⑨

第二陣の軍割の完了をみたその翌二七日、出兵の一件を伝える領内一統の仰渡しが出された。そのなかで、「下々之もの風聞等承り猥りに動揺不致候様、屹度可被申付候」とあるように、この時藩が恐れたことのひとつに民心の動揺が招く不穏な状況の出来という問題があった。当時、「巷説紛々として津軽領などはおとしいられ、能代男鹿辺大変なりなど、

女童へなど語り回る」^⑪状況であり、しかも、「異船三既渡口まで残らず取切り渡海ならず、南部領浦々是又然りなり、津軽領深浦辺まで見えぬれは、今とは能代辺へも来りつらん」^⑫という情報もたらされるに及んで家臣団内部においても、事態に対する動揺はかくせなかったのである。したがって、非常事態における領内での異変勃発の危険性は、実態としてはともかく、藩側の認識としては無視できない問題としてあったのであり、その意味でも、なによりもすみやかな対応を行うことが急務であった。

それでは、以下において、「出兵」の経過と実態について具体的に検討していきたい。

(2) 第一・第二陣の実態

箱館奉行の出兵要請に対応して編成された軍団は、その出兵の時期と任務の内容から、文化四年五月二五日に出發したグループ（第一陣）、同年同月二九日に出發したグループ（第二陣）、領内の要所の警備にあてられたグループ（第三陣）の三つに大別できる。ただし、第二陣として編成されたものの一部は後述のように、藩の方針の変更により国もとに残留することとなり、ここではそれを第三陣に含めておきたい。

さて、第一陣は、幕府より出兵の要請があったその当日に軍割が行われ、翌日に出兵したグループである（表1）。陣場奉行金易右衛門は、出兵当時能代奉行の職にあり、その後郡奉行、勘定奉行などの重職を歴任した典型的な役方の能吏であり、^⑬注目すべき人選である。すなわち、こ

の人選は、かならずしも戦闘という軍事的要請にそったものではなく、ほとんど能吏としての金の個人的資質を評価してのものといつてよい。また、全体として鉄砲方の比重が大であるのは、「重く火砲を以争奪致候付、弓鎗等よりも鉄砲人数多き方相当地理に候間、右之心得を以用意致し可然候」という箱館奉行の指示に対応したものである。

第一陣は、五月二五日に久保田を出発し、能代・大館・碓が関經由の陸路をとって津軽領に入り、三厩より渡海して、六月一〇日に箱館に到着している。その後、任地の変更を指示されたことから、箱館奉行との数回にわたる折衝のち一九日にいたって、七重浜が秋田軍の駐屯地と決定した^⑮。

第二陣の軍割が終了したのは五月二七日である(表2)。第一陣と比較してみた場合、その員数が大幅に上回る。しかし、鉄砲隊は根本庄右衛門の率いる一隊のみであり、この軍割の中心は、向帯刀組・牧野茂右衛門組・梅津与左衛門組の、各「戦士」隊にあるといつてよい。この点は、第一軍にみられない特徴である。しかし反面、第一陣にみられる大

表1 第1陣軍割

役 職	各 員 数	従者とも	足 軽	備 考
陣 場 奉 行	1	1 1		金易右衛門
鎗 大 将	1	9	3 0	井上清右衛門
(小荷駄奉行兼帯)				
鉄 砲 大 将	1	9	3 0	高垣彦右衛門
鉄 砲 大 将	1	9	3 0	今村清五郎
弓 大 将	1	9	1 5	信太瀬兵衛
物 見 役	1	7		大山矢五郎
吟 味 役	2	6		大井丈助、小野崎五兵衛
物 書 役	2	6		菅又蔵人、戸嶋文蔵
割 役 役	1	3		岡崎嘉左衛門
兵 具 役 力	2	6		小室伊織、奈良円太
鎗 与 力	2	6		高根仁右衛門、茂木勘四郎
鉄 砲 与 力	6	1 8		長沢文蔵他 5 名、高垣彦右衛門組
大 筒 役 人	4	1 2		中川友右衛門他 3 名
鉄 砲 与 力	6	1 8		後藤九蔵他 5 名、今村清五郎組
大 筒 役 人	4	1 2		村野儀右衛門他 3 名
弓 与 力	3	9		小松三左衛門他 2 名、信太清兵衛組
歩 行 目 付	2		2	石川忠四郎他 1 名
医 師	2	6		
小 計	1 5 8		1 0 7	計 2 6 5
小 兵 具 組 足 軽		1 3		
通 夫		2 2		
大 工		3 1		
木 挽		2 0		
鍛 冶		4		
人 足		2		
厩 者		3 0		
		3		
小 計 ・ 計	1 2 5			計 3 9 0

・東山文庫「箱館江御加勢被仰付候砌諸事覚」より作成。小計および計は試算である。

表 2 第 2 陣軍割

役	職	人	員	従者ともに	足輕、小者	備	考
軍	将	1	8 3	3 0		向帶刀、歩行、中間等 8 2 人、 横手野扶持足輕、手付、夫丸等 3 0 人	
※番	頭	1	1 9			松野茂右衛門	
番	頭	1	2 5			梅津与左衛門	
※組	頭	1	7			林庄兵衛、松野組	
※戦	士	2 5	1 2 5			信太留治他 2 4 名	
組	頭	1	7			小貫九兵衛、梅津組	
戦	士	2 5	9 9			望月信太夫他 2 4 名	
戦	士	1 5	4 8			伊藤助右衛門他 1 4 名、向組、横手給人	
※鉄	砲 大 将	1	9			根本庄右衛門	
※鉄	砲 与 力	4	8			菅生三治他 3 名	
鉄	砲 与 力	4	1 0		} 2 0	近藤文五郎他 3 名	
※大	筒 役	6	1 2			田名部平八他 5 名	
長 柄 大 将	将	1	9		2 0	梅津徳左衛門	
横 手 組 頭	頭	1	7			宮木九兵衛	
鉄 砲 大 将 兼 帶	兼 帶	1	7				
与 力	力	4	9		1 5	吉成重太他 3 名	
横 手 組 頭	頭	1	7			上遠野監物	
与 大 将 兼 帶	兼 帶	1	7				
与 力	力	1	2		5	落葉助内	
旗 奉 行	行	1	7		1 4	滑川伊兵衛	
同 付 添	添	3	1 0				
大 馬 印 付 添	添	1	3		2	助川清右衛門	
小 馬 印 付 添	添	1	3		2	折打周太	
大 鼓 付 添	添	2	7		2	高橋勝五郎他 1 名	
※番頭金鼓付添	添	1	1			磯部久右衛門	
※旗 付 添	添	1	3			梅津藤左衛門	
※目 付	付	1	9			石井永治	
※歩 行 目 付	付	2				斎藤伝治他 1 名	
※小 人 目 付	付	2					
目 付	付	1	8			藤木野内	
歩 行 目 付	付	5					
小 人 目 付	付	4					
船 上 乗 歩 行	行	3			1	小人 1 名	
物 見	見	4			4	手付 1 名	
※勘 定 賄 方	方	1	3			茂木团右衛門	
勘 定 賄 方	方	2	6		} 5		
小 荷 駄 支 配	配	1	3				
医 師	師	1	3				
馬 医	医	1	2		3	厩者 3 名	
馬 乘 馬 医 兼 帶	兼 帶	1	2		1 0	厩者 7 名、小者 3 名	
計			7 0 9				
			※ 2 2 0				

・東山文庫「松前御加勢記」により作成。※印は実際に出兵したもので、「箱館江御加勢被仰付候
砌諸事覚」で補った。計は試算。

工・人足・鍛冶などがほとんど含まれていない。つまり、第一軍と第二軍の両者により、いちおう完成された軍団が構成されるしくみとなっていることがわかる。さらに、第二陣で指摘しておきたいことは、向帯刀組に示されるように、横手給人の動員である。それが第二軍のなかにあって分散されず、その組下持である向帯刀のもとに統括されていることに注意しておきたい。なお、史料上、横手給人の場合にはそのことが明記してあるので（「松前御加勢記」）、その他の場合は、久保田給人とみて間違いない。

いずれにしても、この全体が派遣されていれば、第一軍と合わせて千名に及ぶ大規模な軍団が出現するはずであった。しかし、実際に出兵したのは、表中に※印を付したもののみであり、向帯刀とその組下たる横手給人は秋田領内に残留することとなったのである。その理由については、次のような藩側の認識にうかがうことができる。

此度箱館御奉行様へ御達御座候ニ付、御届申上候通、去月廿五日、加勢之人数城下出発為致、猶追々箱館御奉行様へ御達之品ニより発向為致候手配ニ而罷有候、猶又右京大夫領分迎茂数十里之浦積ニ御座候間、万々一右人数追々指出候得へ、異国船渡来候模様ニ寄、残人数ニ而防御手薄ニ相見得候節へ、海浜無之向寄之御領主様江加勢人数之儀申達候様ニ仕度、此儀尤有之間敷事ニ御座候得とも、逆境之事故、兼而御内意相伺置候様ニ申付越候、以上^⑩

右の史料は、秋田藩江戸留守居より、六月三日づけで、老中土井利和へ提出された伺書である。これによれば、幕府の命令の重要さを考えつつも、秋田は海岸を領有する地ゆえ、その警備にあたることの重要さを理

由として、全体としては、出兵によって生じる負担を回避する論調となっている。しかし、のちに、この海岸を領有するというのが、幕府の海防策の中に位置付けられる際の、秋田藩の重要な要件となる。

さて、第二軍は、能代より水路をとり、三厩から箱館に渡った。^⑪途中、気候不順のための遅れがあり、第一軍に合流したのが七月二日で、以後、八月五日の帰国まで彼地に駐屯したのである。

（３）文化四年の海岸警備―第三陣

次に、第三陣について述べたい。先に述べたように、この三陣は、領内の海岸警備にあてられたものであり、出兵という軍事行動には直接は関っていない。具体的には、戸村十太夫・佐竹左衛門・向帯刀の三名を軍将とするグループで、兵卒は各自の組下給人である。このうち、向帯刀組は、先述のように、当初出兵の第二陣に編成されながら、残留することになったグループである。

出兵要請の事実とその軍触れは、当日の二四日のうちに早飛脚で、組下の在所横手にもたらされている。^⑫そしてこの動員令は同地において、翌二五日、各組頭を通じてその組下給人に下達された。彼らは従者を伴って、遅くとも六月一日には久保田に到着している。このうち、戸村組は、当初より男鹿方面の警備を目的として召喚されているが、佐竹組に対しては、「十太夫右御用被仰付候ニ付、横手御城江ハ湯沢ハ佐竹三郎引越相詰候」として戸村組出張後の横手在番が命じられている。^⑬

しかし、藩は、早くも六月一三日にはこの両軍の任務を解いて在所へ

の帰還を命じ、向帯刀の軍だけを久保田に残留させた。この間の事情を考えてみよう。

寛

箱館表へ御加勢御人勢追々被差向候儀は先頃被仰知通ニ候所、猶以此度従 公儀御人数三百人程可差出之旨御達有之候、乍去追々七百余御加勢被成候間、御人勢ハ不指向候、将又彼之地先日被差立候御飛脚昨十二日帰着候所、箱館表弥以穩ニ相成候越ニ付、男鹿浦堅戸村十太夫并組下給人共、隙明帰邑被仰出候、併向帯刀組五十騎一備分者、猶以御手配被成候間、此旨被 仰知候、乍去御増口を始此表一統取締之儀ハ猶以嚴ニ可被申渡候^①

すなわち、戸村組による男鹿警備の解除は、箱館における平穩状態の相対的な回復を契機としていること、これに対し、向組は万一の情勢変化に應じて領外派遣の予備部隊として位置付けられていたことがわかる。しかし、それにしても、平穩状態の回復という認識に基いて領内要地警備の解除を行ったのであるならば、向組の予備部隊が継続されたのはなぜかという理由が不明である。

この点は、次のように理解される。向組はあくまでも出兵要員の予備部隊であった。すなわち、戸村組が藩内政策の枠の中で動かされているのに対し、向組は、出兵という幕府の軍役動員の体系に位置付けられているということである。それゆえ、前者が藩独自の判断によってその任務を解かれたのにたいし、後者は、七月一四日の「箱館表穩ニ付軍將差遣ニ不相及」^②という箱館奉行の達書をうけて、はじめて在所への帰還を

命じられるのである。以上のことは、換言すれば、戸村組による男鹿警備の解除は、そのまま外庄に対する秋田藩の危機意識の消滅を示すものといえよう。これに対して、向組の残留は、予想される幕府の軍事動員に対する危機意識によるものであり、外庄それ自体に対するものではない。したがって、外庄に対する秋田藩の危機意識は、男鹿警備解除の段階で著しく後退しているのである。

(4) 文化五年の海岸警備

ところが、外庄に関わる幕府の軍役動員は文化四年一二月、ふたたび現実のものとなった。領内海岸線の警備を命ずる幕令が下されたのである。

領内海岸付々之場所、先達而中川飛驒守・遠山左衛門・村上監物見分之上、異国船防方之儀、委細申聞候次第茂有之候得共、私領儀者領国之取斗ひニ而和被仰筋ニ付場所等逸々ニ者不申達候条、尚又疾与勘弁を加ひ手当可被申付候、勿論異国船又々船掛難相成場所者備方間遠ニ而茂不苦候、湊口又者船掛相成候場所者手技無之様被申付儀專要候、新規ニ遠見番所・大筒場等設候者其段可被申聞候、難聞受儀茂候は、飛驒守・左衛門江可承合候^③

史料中の中川飛驒守等については後述するが、秋田藩は右の指示を受けて、文化五年二月はじめ、領内海岸警備の陣割を確定した(表3・これを、文化四年の戸村らの警備と区別し、文化五年の海岸警備とよんでおく)。

表 3 文化 5 年領内海岸警備体制

① 能代湊固め

侍 大 将	1 人	向飛弾（相手番・横手組下持）〔上下56人、他に夫丸50人〕
検 使	1	次田内記〔上下35人〕
戦 士	3 0	向飛弾組下横手給人〔上下2人〕
与力・金鼓役等	2 0	
足 輕	3 0	
目 付	1	〔上下8人〕
旗 奉 行	1	〔上下6人、付添士横手給人7名上下2人づつ〕
使 番	2	〔上下6人づつ〕
吟 味 役	1	〔上下3人〕
兵 具 役	1	〔上下2人〕
鉄 砲 大 将	1	菅谷隼人（物頭）〔上下9人〕
鉄 砲 与 力	1 0	{ 大筒方 5 } 〔上下2名づつ〕
		{ 小筒方 5 }
足 輕	5 0	〔60人〕 } 一番手
鉄 砲 大 将	1	宇佐見三十郎（物頭）〔上下9人〕
鉄 砲 与 力	7	{ 大筒方 3 } 〔上下2人づつ、横手2名〕
		{ 小筒方 4 }
足 輕	5 0	〔60人〕 } 二番手
鎗 大 将	1	梅津徳左衛門（物頭）〔上下9人〕
足 輕 役	5 0	〔30人〕
兵 具 役	2	
能代方吟味役	2	} 三番手

② 土崎湊固め

侍 大 将	1 人	渋江堅治（相手番・刈和野組下持）
検 使	1	小場小伝次
鉄 砲 大 将	1	阿曾村新八郎（物頭）
与 力	3	すべて小筒方
足 輕	6 0	渋江村30名、与力30名
戦 士	3 0	久保田給人
目 付	1	
大 番 組 頭	2	小貫九兵衛（副役）・吉田藤右衛門
旗 奉 行	1	山崎縫殿（戸村十太夫組下給人）
使 番	2	
金 鼓 役	2	
兵 具 役	2	
鉄 砲 大 将	1	中丸治右衛門（大番組）
与 力	6	大筒方2名、小筒方4名
足 輕	5 0	
遊 軍（「指揮次第何方なりとも出張」）		
鉄 砲 大 将	1 人	黒沢庄太夫
与 力	3	小筒方 } 戸賀固め
足 輕	3 0	
鉄 砲 大 将	1	森田作兵衛
与 力	3	
足 輕	3 0	
鉄 砲 大 将	1	駒木根数馬
与 力	3	小筒方 } 佐竹左衛門に属す
足 輕	3 0	
鉄 砲 大 将	1	阿曾村新八郎
与 力	3	小筒方 } 渋江堅治に属す
足 輕	3 0	

③ 男鹿固め

侍	大	将	1 人	佐竹左衛門（南家・湯沢所預）
検		使	1	宇都宮帶刀（相手番）
鉄	砲	大	1	駒木根数馬（大番組）
与		力	3	
鎗	大	将	1	佐藤佐七郎（物頭）
足		輕	9 0	侍大將付30名、鉄砲大將付30名、鎗大將付30名
戦		士	3 0	} 左衛門組下湯沢給人
与	力・その他		2 0	
目		付	1	
旗	奉	行	1	佐藤要人（左衛門組下湯沢給人）
斥	候	使	2	

④ 船川固め

鉄	砲	大	将	1 人	平塚郷左衛門（物頭）
鉄	砲	与	力	5	大筒方 2 名、小筒方 3 名
足		輕	3 0		
吟	味	役	2	郡方吟味役	

⑤ 戸賀固め

鉄	砲	大	将	1 人	小埜崎官平
鉄	砲	与	力	8	大筒方 3 名、小筒方 5 名
足		輕	5 0	25名づつ60日交代	
吟	味・見廻	役	2		

⑥ 遊軍（浮勢）

浮	武	者	大	将	1 人	梅津与左衛門（番頭）
大	番	組		頭	2	高橋多吉・小貫彦九郎
金		鼓	役	1		
大		筒	役	2		
大	め	し	打	1		
浮	武	者		2 0		
足		輕	3 0			
与		力	3			
浮	武	者	大	将	1	梅津頼母（番頭）
大	番	組		頭	2	川井角介・川又六右衛門
金		鼓	役	1		
与		力	4			
浮	武	者	3 6	久保田給人（26）・塩谷右膳組下（5）・佐竹河内組下（5）		
与		力	3	塩谷右膳組下		
足		輕	5 5	梅津頼母付（30）・角館鉄砲足輕（25）		
浮	武	者	大	将	1	真崎彦六（番頭）
大	番	組		頭	2	佐々木伝五郎・金子武右衛門
金		鼓	役	1		
与		力	3			
浮	武	者	2 0	久保田給人（10）・茂木若狭組下十二所給人（10）		

・東山文庫「異国船到来ニ付御軍馬割」より作成。なお同史料では従者の数が不明であるが、能代固めについては、戸村文庫「海浜御備立心掛三拾騎一人数調御帳」によって〔 〕中に補った。なお両者に若干の記載の相違があるが、大きな違いはなく、本表は前者の史料を土台としている。

ここで注意される点をいくつか整理しておこう。

第一に、いずれも幕府の指示どおり「湊口又者船掛相成候場所」であるが、特に要港である能代・土崎の警備に重点がおかれ、ついで男鹿に力点がおかれている。これは人数だけではなく、軍の構成からも、船川・戸賀と比較すれば明らかである。

第二に、浮勢などの予備部隊がおかれ、機動的な体制がとられている。

第三に、大將格として組下持大身の動員が注目される。特に、能代・土崎・男鹿には、向飛驒（横手）・渋江堅治（刈和野）・佐竹左衛門（湯沢）らの組下持大身が、その組下給人とともにまるごと動員されている。他にも、塩谷右膳・梅津頼母・茂木若狭などの組下持およびその組下給人が浮勢として配置されている^{②④}。

第四に、所預支配のもとに、在々給人とならんで、久保田給人がそれを補うかたちで配置されている。例えば、「指揮次第何方なりとも出張」とされた組のうち駒木根数馬組は在竹左衛門支配に、阿曾村新八郎組は渋江支配に配置されている。また、浮勢は、番頭を大將格とし、その下に久保田給人とともに在々給人が配されている。組下持大身とその組下給人の比重の重さは歴然である。前年度の出兵が、すべて久保田給人で編成されていたのに比して著しい特徴である。

ところで、文化四年の出兵時に男鹿警備にあたつた戸村十太夫の組がその任務を解かれたのは同年六月であり、右の警備体制がしかれたのが五年二月、その間わずか七ヶ月である。しかも、前年度のそれが男鹿のみを対象としていたのに対し、今回はその対象地が五箇所にもおよんでおり、動員数も前年度とは比較にならない。両者の間には質的な違いを

認めるべきであり、後者の直接の契機が先の幕府令にあったことは疑いない。次節では、ふたつの海岸警備体制の質的な違いのもつ意義について考えてみたい。

（5）文化五年海防体制の意義

海防という問題に関しては、秋田藩独自の対応が、文化四・五年以前において全くみられなかったわけではない。例えば、文化二年には、能代海岸の警備のために、物頭二名・鉄砲組小頭八名・足軽六〇名という警備陣を配備している^{②⑤}。これは、当時能代奉行であった金易右衛門の、「異国船壹艘秋田郡戸賀子ブト嶋より三里程沖を通り、能代湊日和山之方へ寄せ、地形より二里程沖江見得候^{②⑥}」という具体的な報告に応じてなされたものであった。ここには幕府の指示は介在していない。つまり、この段階で、藩は外圧に対する独自の危機意識をもっていたのである。文化四年の男鹿警備はこうした危機意識に基づいているが、それは一節で述べたような巷説・風聞などの不確実な情報によって形成された側面が多分にあった。だからこそ藩は、出兵軍からの現地報告が到着するや、「彼地静穏」として、戸村組の男鹿警備を解除し、ただちに在地に帰還させたのである。

ところが、文化五年の海岸警備には、はっきりと幕府の意図がはたっていた。その直接の契機が四年一二月の幕令にあることはすでに述べたが、実はそれに先立つ七月松前に向う途上の大目付・中川飛驒守の一行より、藩は次のような指摘をうけていた。

(前略)蝦夷地争乱之次第ハ御聞及之通之処、右ニ付摂津守殿・拙者渡海可為致年寄中被仰付、猶又近々西海岸見分致候様ニ被仰聞、右御用筋故ニト巨細ニ被分置候儀ハ拙者連も不被指心得候得共、エトロフ焼打以来、ヲロシヤ人決して御手切ニ相見^(不脱力)得申候、此儀追而□上御達シ可有之や、基処ハ睨ト難申談候、然ル処、御領分海岸御備之書き出し候之内、事情篤ト相深、穩便ニ可取斗候趣ニ相見得申候、尤是上之上御達其通ゆえ、左様之御心得尤もニハ候得共、自余之國ト違ひ、ヲロシヤ人におゐてハ右等之御仕向都而御不用ニ存候、先達而ヲロシヤ人々来二月中又々可参なとト申来候儀者、人驚ス謀トハ乍申、又参り申間敷とも不被申候故、上ニも夫々之御用意有之候、依而懸存之旨猶申談候、海岸之御備御城下之御手配至極御都合之事ニハ候得共、ヲロシヤ人船之儀者洋中自在ニ乗廻シ候ゆへ、便利之地ヲ伺、万一不図焼打等被致候而者八森辺を始、御城下之余程里数も相隔候場所ニ候、足之下ノ鳥之飛立様之騒き有之間敷共不被申、左様之節ハ三日四日之騒きニ相成候而ハ実ニ御国之恥ニ相成、此処御考被成寄来候、鼻先ニて打払候ハ、高声いたし引退ゆへ、唐銅之大筒杯トハ運送之勞頻茂有之候間、木筒などの御手当可然や、仍之御備不足と存候而ハ無之候得共、存付候御談いたし候^⑦

右の史料中で注意しておきたいことは、これ以前に、「御領分海岸御備之書き出し」が、藩より提示されているとみられる点である。いまその史料自体は確認できないが、右の文面からみてかならずしも大目付一行を満足させるものではなかったと思われる。先の幕令では警備地についての指示をしていないが、中川の指摘は、警備の手遅れから生じる

騒動を「御国之恥」と手厳しい。幕府権力の圧力であることは疑いようがない。

秋田藩は、ここではつきりと現実認識の転換に迫られた。ここに、領内海岸警備の問題は、秋田藩独自の危機意識に関りなく、幕府の海防策の一環として位置付けられることとなった。文化五年の海防体制成立の意義はこの点にあるといえよう。

ところで、海岸警備の実施経過は次のようである。

文化五年辰四月中ノ男鹿・岩館・戸賀江六十日交代ニ而御武頭大筒方相詰候処、彼地穩ニ相成候ニ付、同年七月下旬ノ被為引置候^⑧

つまり、実質的な警備体制は、四月より七月までの約四ヶ月間行われ、その後ひとまず解除されている。また、能代・土崎については実際に駐屯した事実には知られず、おそらく軍割にとどまっていたと思われる。しかし、男鹿方面の解除にしても「彼地穩ニ相成候ニ付」とあるように、北方における外庄の相対的低下に応じたものであり、逆にいえば、状況の如何によって常に再現されるべき位置付けを与えられていたといつてよい。能代・土崎も事情は同様であった。幕府の海防策の及ぼす重庄は、いささかも変ることとはなかったのである。

二、外庄と藩制

(1) 「出兵」をめぐる藩の意識展開

前章では、「出兵」の実態と、秋田藩が幕府の海防策の一環に位置付

けられていく過程をみた。本章では、そのような動きの中で、どのようなように藩としての対応を行い、またそこからどのような矛盾が派生してくるかという問題について考えていきたい。

まず、意識面での対応である。最初に、「出兵」の発端となった、文化四年五月の箱館奉行の達書から検討し、次に藩の現状認識のありかたを探ってみた。箱館奉行の達書は次のようである。

東蝦夷地之内エトロフ島へ異国之大船二艘渡来候而及争乱、クナシリ島へも附寄り可申趣申越候ニ付、南部大膳大夫・津軽越中守兼而彼地勤番ニ候条、今度増人数之儀申達候、然ル処、異国人共追々援兵を此方地方へ押寄せ可申も難斗、左候得者、右両家人数而已ニ而行足り不申候間、鉄砲組足軽・大筒中筒玉葉等丈夫ニ用意致、船ニ而早々箱館へ向可被差出候、尤も人数一同ニ揃兼候ハ、追々ニ而も被指出候様存候、自然異変之節、両家勤番人数ニ而不足之儀有之候ハ、向寄御領分之御方へ可申達旨、兼而申上置候儀有之候、且寛政三亥年御書附之趣茂有之候間、此度申達候

五月十八日

羽太安芸守

佐竹右京大夫殿役人御中

以手紙申達候、然者其人数之儀分限高も有之儀ニ候得共、火急之変事大切之時節ゆへ、心得を以人数之繰出候存候、玆又蝦夷之儀海防第一之地ニ而異国人とも上陸致候事ニ而も、海岸辺被相備、重火砲人数多き方相当之地理ニ候間、右之心得を以用意被致候様存候²⁴

「以手紙」以下は追文である。本文の末尾にある「寛政三亥年御書附」

とは、同年九月のものと思われるが、異国船の接近に際して諸大名のとるべき対応の基本を述べたものであり、かならずしも文化四年の出兵に關して具体的な規制を与えるものではない。むしろ寛政三年令で注意しておきたい点は、予期せぬ事態の出来に際しては、「都而向寄領分えも早々申通し、人数船等をも取揃可被差出候」としていることである²⁵。近隣大名間での援軍派遣の「義務」が、ここで指示されている。

次に達書の内容をみよう。派遣すべき兵の員数については、「一同ニ揃兼候ハ、追々ニ而も被指出候様存候」とあるのみで特に具体的な指示はない。また、追文の「火急之変事」以下の文章は緊急事態ゆえ分限高以上の対応をせよとの意にも解釈でき、微妙である。したがって、幕藩制初頭の軍役規定そのものよりも、むしろいかなる質と量をもつ援軍を派遣すればよいのかという、漠然とした不安のなかで、早急に援軍を派遣しなければならないというのが、このとき藩が直面した課題であった。

それでは、このような状況を藩はどのように認識していたのであろうか。次の史料は、「出兵」にふかく関った金易右衛門ら四名が、出兵の終了した文化四年九月、評議の結果を藩首脳に上申したものである。

覚

万一明年ニも松前又ハカラフト等之交代之為御人数被差出候様被仰付節、其被仰出方ニ御向不被成候而ハ、予め何れニ難申上義ニ候得共、三百里程之嶋々等江被差向候事ニ候而ハ、軍漕を始品々差支之次第差見得、不容易義ニ御座候得者、其模様ニより品々被仰上方も可有之哉ニ候得共、御軍役之義ハ朝鮮征伐等ニも諸大名御軍割茂有

之事ニ御座候得ハ、決而御請不被仰上と申事ニハ難相至義ニ奉存候、況一手位之事ニ候ハ、外ニ御受難相成道理的然相分ケ被仰立方も有御座間敷義ニ奉存候、乍然被仰渡候上ハ、相難候ケ条ヲ以御願御訴訟被仰上候次第も可有御座や、又ハ人数之多少場所之善惡も有之義ニ御座候得ハ、御手順宜キ方ニ相成候様之義も可有之と存し、便リニも可相成候得ハ、権家之内御老中様又は其懸之内御手之届候程、當時より御手入被差置候方可宜候、固り御趣意を以御遁れと申儀中々以有御座間敷候得共、唯ニ被相止候義者無之事ニ奉存候、併只管ニ御遁れ被成置様ニ相聞得候而者、却而如何之事ニ御座候間、是等之義ハ御留守居御用人并武膳江も被仰含方も可有御座御義ニ奉存候

九月^⑫

出兵の部隊が帰国した直後における協議内容であるが、それだけに、非常事態に対する認識として、注意すべき点がいくつかある。

第一に、準備すべき人数について明確に把握できないことに対するとまどいがみられる。また、出兵を明確に幕府の軍役動員と認識している反面、その事例として「朝鮮征伐」をもちだすなど、既存の軍役規定に対する認識が風化している。

第二に、藩の不安はもっぱら「人数之多少」「場所之善惡」によせられているが、この問題の解決を、主に江戸表における幕府重職との折衝の成果に期待している点が注目される。第一点との関連でいえば、派遣軍の規模については、幕府と藩との折衝を通して決定されるというのが、この段階での軍役動員の実態だったのではないだろうか。^⑬

ところで、従来より指摘されてきた事実として、南部・津輕両藩が蝦

夷地の定式警備を命じられたのに対し、秋田藩は、仙台・庄内藩等とともに、臨時援兵を担うものとして位置付けられた、ということがある。^⑭

この点は客観的事実としてはもとより重要であるが、藩の側にとってもその危機意識を特質づけるうえでも重要な意味をもっている。ところが右の上申書には、この事実に関する指摘がない。それどころか、「万一年ニも松前又ハカラフト等之交代為御人数被差出候様被仰付節」とあるように、南部・津輕にかわる勤番に対する危機感すらだいている。これが右の史料より指摘しておきたいことの第三点めである。

この点についてさらに述べたい。南部・津輕両藩の蝦夷地勤番は、第一次蝦夷地幕領化を契機とするが、秋田藩が両藩の「定式」にたいして「臨時」の援兵を担うものとして位置付けられた事実を、史料上最初に確認出来るのは、文化五年一二月の、老中青山忠裕の達書である。すなわち、

蝦夷地之義、定式之手当者南部大膳大夫津輕越中守江被仰付置候得共、臨時人数入用之時者、松前奉行ハ申越次第其方人数可被指出候、松平淡路守江茂相達候条可被其意候^⑮

というのがそれである。蝦夷地警備を南部・津輕両藩の「定式」と規定し、秋田藩を「臨時人数入用之時」の援軍派遣を担うものとして位置付けている。このことを確認したうえで、次にふたつの仰渡しをみてみたい。

此度箱館沖江異国船渡来争乱之義有之に付、為御加勢追々人数被指出候、此段被仰知候、猶又軍将御番頭等も被差出候御取調に候、依而者追而被仰渡候義も可有之候故、銘々兼而此旨可被相心得候、下々

之もの風聞承り猥に動揺不致候様屹度可被申付候、火之用心を始め一幹忽せ之義無之様可被致候³⁹

蝦夷地之儀へ、定式御手当者南部大膳大夫・津輕越中守様江被仰付置候得共、臨時人数御入用之時者、松前奉行御達次第御人数被指出候様、今度從公儀御達之趣有之、且津輕越中守様も蝦夷地異変之儀有之節、御自国之御加勢永く御頼被仰進候ニ付、今年兩処御加勢御人数一ト通り心懸被仰付候得共、右之外時宣次第夫々可被行出候間、一統心掛被仰付候、同様之心得以尚更無油断用意可有之候⁴⁰前者は、文化四年五月二七日のもので、同年の箱館奉行の出兵令をうけたものである。後者は、文化五年のもので、月日が明らかでないが、書き出しの文言からみて先の青山忠裕の達書をうけて出されたものとみてまちがいない。さて、両者ともにその発布形態は「町触」であり、同様の方法で領内に布達されたものであるが、内容上の決定的な違いは、藩が自らを、南部・津輕兩藩の「定式」と區別して「臨時」と位置付けた認識の有無にある。文化四年の出兵の段階では、藩には未だこの認識がうまれていなかったのではない。

このことを推測させるいまひとつの事例をあげておこう。橋本秀実の「八丁夜話」には出兵の記事が豊富であるが、そのなかで、文化四年の出兵については「松前へ援兵の事あり」と記すのに対し、文化五年および文化九年の出兵軍割については、「当藩にて松前津輕へ臨時援兵」⁴¹「津輕松前へ臨時御加勢」⁴²と記すのである。単なる記載方法の違いとし

ここで藩の自己認識のありかたにことさら言を費やすのは、自らを「定式」と區別して「臨時」と位置付ける意識の確立は、秋田藩の危機意識を特質づけるうえで重要な意味をもっていたと考えるからである。やや年代は下がるが、文化一一（一八一四）年の仰渡条々では、南部・津輕兩藩の蝦夷地警備による財政窮迫を指摘したうえで、

一、此方様ハ万一之節、御加勢第一御頼ニ付御勤番等往々可被蒙仰沙駄ハ一円無之事⁴³

と述べている。南部・津輕兩藩の「定式」勤番と區別することで、幕府軍役に対する危機意識より生ずる重圧感を相対化しようとする意識である。「臨時」であるところに、藩は他藩との違いをみとめ、わずかの救いをみだしているのである。これほどまで、「定式」か「臨時」かが藩にとって重要な関心事であったとすれば、文化五年の青山の達書以前、すなわち文化四年の出兵時にかかる意識が見られないことは注目しておかなければならない。南部・津輕兩藩の「定式」勤番と自らを區別して「臨時」と位置付ける意識の確立、それは秋田藩が幕府海防策の一環としてくみこまれていく過程で形成されたものであった。そしてそれは、単に幕府の制度としての意味にとどまらず、秋田藩権力にとっても主観的な「よりどころ」としての意義をもったのである。

(2) 「出兵」と藩体制矛盾の展開

「出兵」が、藩財政窮乏の激化をもたらしたことはいうまでもないし、そのことを具体的に明らかにすることは重要な課題であるが、史料上の

制約から、今はその課題にこたえることができない。本稿では、出兵によって生ずる、藩権力と家臣団、あるいはそれらと農民の間の矛盾の実態を明らかにすることに視点を限定して述べたい。

とはいえ、藩にとって、出兵という軍役動員が、まず財政上の問題であったことは疑いない。文化四年の出兵に限っていえば、藩は実際に蝦夷地に赴いたものに、合力金と帰国後の賞与を与え（足輕まで含む）、⁴³領内に残留した部隊に対しても合力金を下賜している。このように、じつさいの出兵に参加しないものへの合力金の供与は、この文化四年だけの例外であるが、まず第一回目の出兵要請に満足のゆくかたちで応えるためには、藩権力のもとへのすみやかな家臣団の集中を実現することが必要であったし、そのためにも家臣団の士気を鼓舞するうえで不可欠と判断されたのであろう。これが臨時的な措置であることは、翌五年の仰渡しからも明らかである。藩の財政状況、そしてそこからもたらされる家臣団対策の、藩の基本方針をよみとりたい。

積年重き御借高被成置候ニ付、御家中一統窮迫に相至候所、去年中箱館御加勢御用等被仰付、猶銘々武備心懸之儀被仰渡候ニ付而者、別而迷惑茂可有之、深く御苦勞に被思食候、御財用向之儀者毎度被仰知候通之御差支之上、一昨年来不事莫太之御物入打続、益御借財相嵩、往々御取運方一円御見詰も無之候得共、前後を不被相顧今年差上高半知御割合以御借上被成置、明後年之儀者其節に至否可被仰渡候条可被存其旨候⁴⁴

前年の出兵による財政の窮状を述べ、借知のやむをえぬことを指摘する。しかし、その半知借上すら、例年の六割借知の方針をまげて家臣団の窮

状を考えてのこと、というニュアンスが含まれている。そして、一方では、

此時御合力可被成下候得とも、御時節柄之儀ニ而被相及兼候間、可成丈ケ自力を以用意可致候⁴⁵

として、平時における自分物入りを指示するのである。

藩が家臣団に対して、経済的保障をなしうるか否かは、個々の藩士にとって重要な意味をもっていた。例えば、表2の向帯刀や、表3の向飛驒の場合に明らかのように、軍将クラスでは数十名におよぶ従者を抱えているし、一般の戦士クラスのもので2-3の従者をともなっている。藩士のレベルによってその財政構造は異なるであろうが、これらにかかる経費がすべて「自分物入」になるとなれば問題は、直接個々の家臣団の財政に関してこざるをえない。

これまでたびたび引用してきた「松前御加勢日記」に、次のような記事がある。

- 一、品々御窺も有之、且壹騎武者之面々申合の事も有之候故、五ッ時高橋平吉宅ニ而寄合左之通り
- 一、武器之内有合無之面々 上ニ而御借し被下候や之事
- 一、供人幾人召連れ候て宜敷候や之事⁴⁶
- 一、乗馬上ニ付御借被成候や之事

この伺書の提出者は、第二陣参加の兵士であり、右の件は番頭の梅津与左衛門（表2参照）を通じて、軍将向帯刀まで上申されたのであった。出兵に際して、一般藩士の関心がまずどのような点にむけられたかを、よく示してくれる史料である。そして、これと同様の事は、文化一〇年

の出兵軍割の際にもみられ、常に発生してくる問題であったことがわかる。これらは、いずれも「上申」「御伺」として出されているが、実態としては、藩に対する家臣団のおだやかな「要求」であったといつてよい。しかしながら、これらの個々の家臣団の当面した課題に対し、藩には総体として応じうる能力がなかったところに、この期の重要な問題があった。藩に経済的な面での期待が持てないとなれば、家臣団は個々のレヴェルにおいて対応せざるをえなくなる。そしてそれは地方知行制という秋田藩制の特質上、給地百姓の収奪という方向にむかうこととなる。こうして、問題は、単なる財政問題としての性格をこえて、藩体制そのものと深く関ってくることとなるのである。

次は、文化四年六月の仰渡しである。

覚

今度箱館江御加勢被差向候に付、角館給人杯之内にも候哉、軍用金之由を申立、知行所村々江当秋小役銀先納、又者調達等無体に申懸候由相聞得候、他国争乱有之に付候而も、猶更御領民御苦勞可被成御時節、右躰不埒之致方有之段御時節を不相弁甚如何之事候条、追々御吟味之旨有之候間、心得違無之様、組下中江も可被仰渡候、以上^{④③} 角館は、藩主家の分家（北家）が居住した所であり、その下には多数の在方給人が組下として配属されていた。右の仰渡しは、給人が給地百姓に対して、「出兵」に関する軍用をたてまゑとして、恣意的な収奪を加えることを禁じたものである。なお、これとやらんで、「在々給人」一般を対象とした同内容の仰渡しが出されていることから、このような藩

の危機感には角館給人に限らず領内給人全体に対するものであったことがわかる。

また、次のようなものもある。

松前蝦夷地江異国舟来着之由、御国江茂御加勢被仰付候、右ニ付御地頭方為軍役之百姓召連候共参り申間敷、古来ハ相勤候事ニ候得共、五斗米御取立以後被差免候段、共ニ被仰渡候^{④④}

これは、雄勝郡川連村肝煎の日記の、文化四年の記録の一部である。これによれば、給人の給地百姓に対する私的支配は、金銭や物資の調達をこえて、農民そのものの軍事動員におよんでいること、少なくとも藩はそうのように認識していることがわかる。そして、そのような夫役は五斗米納入によって消滅している、というのが藩側の理屈である。

ところで、すでに第一章に示した各表で、動員された各藩士がそれぞれ幾人かの従者をしたがえていることを、われわれはすでに知っている。ここでは、最も一般的なレヴェルの藩士の場合を一例として示そう。

次は、文化四年の出兵で向帯刀の組下として動員された横手給人、上^か遠野^{どの}子之助の場合である。上遠野は、表2中、「向組」の「戦士」として示されている。上遠野は、四名の百姓を供夫としてひき連れ久保田に出席したが、その徴用の事情を次の史料よりうかがってみよう。

此度蝦夷地エトロフ江異国大船致至来及騒乱候ニ付、箱館御奉行羽太阿芸守様より御国江御加勢被仰進候ニ付、嫡子子之助御加勢御人勢被仰付難有奉御請、然所供人不足ニ付、其方儀ハ屋敷百姓之事故供人申付候所、不顧生死早速承知致供致候段、誠ニ心切之至リニ候、依之屋敷高永々可宛行、猶此末火急之儀有之供人申付候節者、兼而

可為承知もの也

文化四年卯七月 一日

上遠野喜太郎秀英

仙北郡二本柳村

屋敷百姓藤八^⑤

向帯刀の部隊が、実際には出兵せず予備部隊として久保田に残留したことは前述したとおりである。しかし、いったん帰村した藤八に対して、「箱館江出張ニ相成候へ、早速罷登可申候」と指示していることから、この徴用が箱館までの動員を予定したものであることは明らかである。そして、なによりもここで注意しておきたいことは、この徴用が、給人―「屋敷百姓」という個別的な繋りに基づいてなされていること、屋敷高の永代宛行など、本来給人には認められていない恣意的権限が発動されていること、である。藩が恐れていた事態が、現実のものとしてあったのである。

以上のことは、秋田藩制の特質そのものに深く関る性質の問題であった。すなわち、慶長七（一六〇二）年滅知転封の処分をうけ出羽の地に「征服者」としてのぞまなければならなかった佐竹氏は、転封直後より、領内の軍事上の要地に佐竹氏一門および大身給人を「所預」として配置し、その下に家臣団の多くを組下給人としてふりわけた。^⑥したがって秋田藩では、出羽入封時に規定された軍事的意図から、一貫して地方知行制を維持することとなる。そしてその場合、給人の経済基盤―軍事上の物資の調達などを含めて―が、給地百姓の収奪におかれることは必然であった。右の、上遠野子之助の場合は、その好例といえよう。

それでは、藩権力による人的・物的徴用はどのようなであろうか。藩が、農民からの人馬調達について原則らしきものを示したのは、出兵の翌五年二月である。

覚

村々御軍割人馬之義、当高百石に付人足老人、貳百石に小荷駄老足口付之もの共指出候は古来よりの御定に候所、久敷打絶候に付、猶為心得之被仰付候、且先年被召夫候節者定式郷役之事故、御手当銀等不被下置候得とも、近年来自然諸郷用も相増候に付、自今他領江被召使候節は別紙之通銀子并根米等可被下置候、人馬数多少之儀者其節之御用次第前条之割合を以可被仰付候間、無遅滞可差出候、右之趣、兼而相心得候様、支配所村々へ可被申渡候、已上

二月

別紙左之通

一、人足老人

他領江被召夫候節、一日文銀老奴貳分つゝ当人江為御手当可被下置候、但、内四分五毛は上より下置、残七分九厘五毛は六郡高割上納被仰付、右を以可被相渡候

一、小荷駄一疋口付人足共

但、鎌耆挺つゝ可心懸候

他領江被召夫候節、一日文銀式奴四分宛差出候ものへ為御手当被下置候

但、内八分毫厘は上より被下置、残り老奴五分九厘は六郡御高を以被

相渡候義、右同断

一、陣中糧米并味噌・塩・途中之旅籠代、上より被下置候、已上⁵⁴
以上のとおりであるが、以下に注意すべき点をあげていこう。

第一に、これによれば、従来の規定では、人足は当高100石につき一人、小荷駄・口取は当高200石につき一組、となっている。しかし、実質的に軍用人馬の調達に現実化したことは長期にわたってなく、しかも種々の夫役は藩制前期に銀納あるいは米納化しており、農民にとっては新たな収奪としての性格をもつものである。

第二に、文化四年の出兵では、夫役調達が「定式郷役」として実施され、無報酬で行われたことがわかる。また、以後における他領への人夫調達の場合は、銀米での合力を行うとしている。

第三に、しかし、その合力は、その六割強が「六郡高割上納」として農民の負担とされている。いずれにしても、「出兵」が収奪強化につながっていることが確認される。

ここで、第一点めに関連して、限られた史料からではあるが、文化四年の人馬調達の実際を検討してみよう。表4は、「松前表御軍用御加勢御跡備夫丸人馬六ヶ所割合帳」と言う標題の付けられた史料より作成したものである。標題に「御跡備」とあるように、おそらくこれは、予備として調達されたものであり、実際に松前に渡ったものではない。またここに記載された村々は、秋田郡（当時）の一部であり、藩全域ではない。「六ヶ所」とは、史料にそって表に示したように、親郷を核とする六組の村落グループをさす。このように限定されたものではあるが、文化四年時の人馬調達のありかたの一端をうかがうことはできるのであろう。

さて、これによれば、馬・口取・人足のそれぞれが、いずれの村の場合も同数ずつ調達されていることがわかる。その割合を各村ごとにみていくと、上下にばらつきがあつて一定しないが、親郷・寄郷組別にみていくと、沖田目村組がやや低い、他はほぼ一四〇石前後に一定するところが指摘できる。これは、おそらく、村ごとによって馬所持の状況や実質的な生産力などの諸条件が異なるために、親郷・寄郷単位で平均化していく方法をとつたためであらう。ところで、ここでの人馬調達方法は先の文化五年二月の藩の仰渡し原則とは必ずしも一致していない。このことは、先の仰渡しに「古来よりの御定」とあるものの実質的にはこの基準にのつとて行われたのではなく、緊急事態への臨時的措置としてこの人馬調達が実施されたものであることを推測させる。先に示した文化五年二月の仰渡しは、文化四年の出兵ののち藩の対応のひとつとして決定されたものと考えてよいだろう。

いまひとつこの表で指摘しておきたい点は給地・蔵入地の別なく一村全体に賦課されていることである。ただし、ここで分析の対象とした地域は、一見してわかるように蔵入地の比率が非常に高い所である。秋田藩では藩政期を通じて約七割が給人知行地であつたからその点からいえば、特殊な地域ということになる。したがって、この「郷役」を賦課する際に蔵入地の集中した地域がとりわけその対象とされた可能性もあるが、ここでは断定できない。ただ、綴子村組についていえば、ここでは例外的になるが、給地率が高く、よつて最初に指摘した点のみは確認できるであらう。このことは、出兵に関する人馬調達が、通常の年貢・諸役とは異なる内容をもつものとして設定されたものであることを示してい

表4 文化4年人馬調達

村名	当高	a人足	b馬	c口取	当高÷a・b・c それぞれの数値	給地率
※綴子村	1,516.77	11人	11疋	11人	137.9	25.9%
鷹巣村	627.624	5	5	5	125.5	87.7
太田新田村	178.596	1	1	1	178.6	75.5
長坂村	38.684	0	0	0		87.0
早口村	479.41	3	3	3	159.8	76.1
小計	2,841.014	20	20	20	142.2	
※坊沢村	703.655	5	5	5	140.7	10.4
前山村	187.007	2	2	2	93.5	0
今泉村	88.792	1	1	1	88.8	0
麻生村	46.039	1	1	1	146.0	10.3
小繁村	42.386	0	0	0		0
黒沢村	46.〔 〕	1	1	1	46.〔 〕	97.9
小計	1,213.941	9	9	9	134.9	
※米内沢村	444.731	3	3	3	148.2	13.3
本城村	371.214	3	3	3	123.7	0
上杉村	426.64	3	3	3	142.2	0.3
道城村	178.015	1	1	1	178.0	0
下杉村	396.098	3	3	3	132.0	1.0
新田目村	212.674	2	2	2	106.3	0
季◎村	311.741	2	2	2	155.9	0
木戸石村	469.076	3	3	3	156.4	0
増沢村	140.29	1	1	1	140.3	0
小計	2,950.479	21	21	21	140.5	
※浦田村	323.171	2	2	2	161.6	2.6
前田村	298.887	2	2	2	149.4	0
小又村	305.275	2	2	2	152.6	0
小測村	121.673	1	1	1	121.7	0
吉田村	186.621	1	1	1	186.6	0
五味堀村	467.123	4	4	4	116.8	9.6
荒瀬村	402.924	3	3	3	134.3	4.4
小計	2,105.674	15	15	15	140.4	
※沖田目村	570.234	4	4	4	142.6	0
小沢田村	838.763	6	6	6	139.8	0
鎌沢村	375.359	3	3	3	125.1	1.2
三木田村	450.783	3	3	3	150.0	0
芹沢村	508.58	4	4	4	127.2	5.9
小計	2,443.719	20	20	20	122.2	
※七日市村	543.057	4	4	4	135.8	24.6
岩脇村	123.141	1	1	1	123.1	0
横測村	212.37	2	2	2	106.2	0
小森村	286.356	2	2	2	143.2	0
脇神村	583.428	4	4	4	145.9	61.6
磨当村	348.106	2	2	2	174.1	0
小計	2,096.458	15	15	15	139.8	

・長岐文庫「松前表御軍用御加勢御跡備夫丸人馬六カ所割合帳」による。

なお給地率は、「六郡惣高村附帳」（寛政6年、秋田県史資料近世編上）によって補った。

・※は親郷を示す。

る。すなわち、給地・蔵入地の別無く一村に賦課されるものとしての「郷役」とされる意味はここにある。先の文化五年二月の仰渡しの、人足合力の百姓転嫁分の賦課もこれと同様の論理であろう。とすれば、他方で給人による先納要求や人足の調達などがある限り、農民にとっては二重の意味での収奪の強化ということになる。

なお、文化四年の表4のような人馬調達が全領にわたって行われたものであるかどうかは、俄には断定できない。人足・馬ともその員数が百に及び、実際に松前に従軍した人馬の数をはるかに越えることから考えれば、やはり特定の地域を対象としたものとみるべきであろうが、その断定には慎重を期すべきであろう。今後の調査と研究にまきたい。

ともあれ、藩は文化四年の出兵には一応の人馬調達を実施し、五年には以降の徴用の原則を確定した。しかしながら、これをもって将来にわたっての軍役動員に応じうる人馬調達の確固たる基盤を、藩が確立したとはいえない。藩権力にとってさいわいなことに、これ以降、蝦夷地の第二次幕領化が実施される安政期まで、大規模な人馬調達を実施しなければならぬ軍役動員は生じなかった。しかしながら、「出兵」を契機として増幅された収奪強化の傾向が、外庄の情勢変化によって不断に拡大されていく性質のものである以上、藩権力と農民の間によこたわる階級矛盾を激化させる可能性をもつものであったことは疑いない。藩が、「出兵」にあたって、まず農政の第一に給人の給地百姓に対する恣意的支配を制限しようとしたのは、このためであった。しかしまた、家臣団にあっても、たえず軍事動員を前提とした緊張状態を強いられる以上、給地への吸着は不可欠であったし、藩もまたすみやかな家臣団の集中を

実現するうえで、一定の譲歩をせざるをえなかったと考えられる。幕府の海防策の一環に組み込まれるという、新たな状況を迎えながら、基本的には、藩はそれに応じきれる方策を持ちえなかったのである。⁵⁹

(3) 軍政上の対応

最後に軍政上の対応について、若干の検討を行っておきたい。「出兵」を契機として、藩がどのような対応を行ったかを考えるためには、「出兵」後の動きを検討の対象とするのが適切であろう。第一章で述べたことと重複する部分もあるかと思うが、文化五年以降の動きのなかから、軍政上指摘できる点を以下にいくつか上げておこう。

まず第一に、当然のごとく藩は、幕府からの達しの有無に関らず、ただちに出兵しうる体制を維持しなければならなかった。表5は、文化六(一八〇九)年と同八年の出兵を前提とした軍割である。ここから、「出兵」後の軍政上の対応の特徴を考えてみよう。まず注意をひかれるのは、その人員の圧倒的な多さである。第一章で触れた第二陣の場合も出兵しなかった兵を含めれば九〇〇名をこえたが、それを大きく上回る。また、その形態も、本体のほかに、二隊の浮勢をおくなど完成度の高いものとなっている。「出兵」後、漸次その形態を整えていったものと思われる。なお、文化六年と八年と比較すると、後者のほうが若干多いが、それは、小者や人足など員数の違いによるものであって、軍隊としての本質的な部分、すなわち、鉄砲隊・戦士・足軽などにおいてはほとんど違いはない。このことは、文化四年の第一・第二陣にも通じることであっ

表5 文化6年・8年の軍割

役 職	文化6(1809)年	文化8(1811)年	役 職	文化6(1809)年	文化8(1811)年
[浮勢備二ノ手]			武者奉行・軍将	1 (50)	1 (50)
浮武者大將	1 (20)	1 (20)	検 使	1 (20)	1 (20)
鉄砲弓大將	2 (18)	2 (18)	陣 場 奉 行	1 (10)	1 (10)
鉄 砲 与 力	8 (16)	8 (16)	鉄 砲 大 將	2 (18)	2 (18)
弓 与 力	2 (4)	2 (4)	鉄 砲 与 力	12 (24)	10 (20)
鎗 大 將	1 (9)	1 (9)	弓 大 將	1 (9)	1 (9)
大 番 組 頭	2 (14)	2 (14)	弓 与 力	3 (6)	3 (6)
戦 士〔浮武者〕	30 (90)	25 (100)	鎗 大 將	1 (9)	1 (9)
大 筒 役	5 (10)	5 (10)	鎗 与 力		
そ の 他 諸 役	24 (67)	25 (62)	戦 士	30 (90)	30 (120)
足 軽	90	97	大 筒 役	10 (20)	10 (20)
〔鉄 砲〕	〔40〕	〔40〕	そ の 他 諸 役	55 (133)	34 (118)
弓	10	10	足 軽	164	161
鎗	25	25	〔鉄 砲〕	〔60〕	〔60〕
〔そ の 他〕	〔15〕	〔22〕	弓	15	15
小 者	23	35	鎗	30	30
人 足	20	20	軍 将 手 付	20	20
郷 夫		50	陣場奉行手付	10	10
大 工・木 挽	10	8	〔そ の 他〕	〔29〕	〔26〕
鍛 冶	2	2	小 者	42	75
厩 者	3	3	大 工・木 挽	25	25
小 計	396	565	厩 者	5	5
計	1,466人	1,732人	人 足 夫	40	60
			小 計	665	726
			[浮勢備一ノ手]		
			浮武者大將	1 (20)	1 (20)
			鉄砲弓大將	2 (18)	2 (18)
			鉄 砲 与 力	8 (16)	8 (16)
			弓 与 力	2 (4)	2 (4)
			鎗 大 將	1 (9)	1 (9)
			大 番 組 頭	2 (14)	2 (14)
			戦 士〔浮武者〕	30 (90)	25 (100)
			大 筒 役	5 (10)	5 (10)
			そ の 他 諸 役	27 (63)	25 (72)
			足 軽	94	94
			〔鉄 砲〕	〔40〕	〔40〕
			弓	10	10
			鎗	25	25
			〔そ の 他〕	〔9〕	〔9〕
			小 者	32	14
			人 足	20	20
			郷 夫		50
			大 工・木 挽	10	
			鍛 冶	2	
			厩 者	3	
			小 計	405	441

・戸村文庫「御備被仰渡人数」（文化6年）及び佐竹文庫「御軍事人数割」（文化8年）による。

（ ）内は従者を含む人数、小計・計は試算。

て、基本的には、量的な面での増加はみられても質的な面での変化が生じていないことを示している。

次に、表示はしなかったが、六年と八年のメンバーを比較してみると、同一人も少なからず見出されるが、総じて広範にわたる入れ換えが行われていることがわかる。つまり、現実に出兵に至らない場合、いったん編成された部隊がそのまま継続されるのではなく、年ごとに入れ換えが行われたのである。文化四年一〇月二日の仰渡しは次のように述べている。

覚

先頃箱館御加勢之為御備組被仰付候所、彼之地静謐に相成、出張之御人数被為引置候に付、一と先右御用隙明被仰渡候、已来万一右様之義有之節は、此度出張不致面々は勿論、出張致候内も鉢に寄り御吟味を以一番手に被仰付候義も可有之候条、此旨兼而相心得、聊無油断有之間數候、已上^⑤

このように述べ、そしてたえず軍割のメンバーの入れかえを行うことによって、出兵再発の緊張を全家臣団共通のものとし、家臣団の藩権力への集中をはかったのである。そして毎年、新たな軍割が完成すること、藩主による「おならし」「御一覽」が行われた。^⑥その内容に、特に見るべき新たなものはないが「法度違背」として領内追放などの刑が施行されていることは注目しておいてよい。ここでも、家臣団は、平時にもかかわらず出兵状況のなかにおかれ、極度の緊張状態を強いられただのである。それによって、藩権力はその集中・強化をはかったのである。

第三に、そのほとんどが、久保田在住の家臣団によって構成されてい

ることである。わずかに、文化六年の「浮勢備二ノ手」の戦士三〇名の中に、向飛驒組下横手羽黒給人二〇名が含まれているのが、在々給人の動員されたものである。また、文化七年の軍割では大館給人の動員が知られ、文化四年の第二陣でもそうした例は皆無ではないにしても（表2参照）、出兵を前提とした軍割が久保田給人を中心に行われていることは明らかである。これは文化五年の領内海岸警備体制で、組下持大身とその組下である在々給人がその中心をなしていたことと対照的である。あたかも両者の間に役割の分担があるかのようにあるが、これは、久保田給人が「旗本」と呼ばれたことに示されるように、同じく藩主に対して直臣であるにもかかわらず、両者に対する当時のとらえ方に微妙な違いがあったためではないかと思われる。やや抽象的な言い方をしたが、史料によって示そう。

文化四年、第二陣が召集された際、藩は兵士全員に合力金を与えたが、その多寡をめぐって、向帯刀組下の横手給人から次のような申し立てがなされた。

口上覚

私共此度松前箱館表御加勢御人勢被仰付御催促にて罷登申候処、御旗本諸士入組禄高次第御備組合被定置、先年之御作法ニ不相替無差別御取扱被成下難有仕合奉存候、然者私共物入始末等之儀を被思召為御合力老人付金三兩宛被下置候段、今日被仰渡難有仕合奉存候、左候処此表戦士之面々老人ニ付四兩与力老人ニ付三兩宛被下置候趣承知仕候、依之申上候、私共出府已来総而久保田同様ニ御取扱被成下罷在候処、御合力筋ニ相当り今日御差別被付置御取扱被成下候義、

乍恐気毒千万奉存候、何ぞ金子多少ニ相抱候儀を以申上候筋ニて無御座、今日御差別被付置被仰付候儀誠ニ御気毒至極奉存候、御時節柄恐入奉存候得共、無抛申上候間、戦士与力迄此表同様御取扱被下度奉願候、以上^③

この口上書の論点が、合力金の額の取扱いにあることはいうまでもないが、ここで注意をしておきたいのは、その底にながれる意識である。すなわち、この口上書は、藩に「久保田同様ニ御取扱」を求めているのであるが、その論理の底には、「御旗本」たる久保田在住の家臣と自らの存在意義の違いを前提とする意識があることは疑いない。

いまひとつ、他の例を示そう。

一体横手・湯沢の風俗敢勇の地なり、郷を出るの日相共に云いて曰く、異国人ともをあらこなしをして旗本の衆へ譲らんと、

此番頭を軍将の組に入たるは損分甚だしく、且つ此の如くせらるゝ事にあらざるなり、元来国家の番頭といへるは旗本組にして、その軍将たるものなり、^④

史料は、橋本秀実の「八丁夜話」であるが、こちらの方が、両者を区別してとらえる意識がより鮮明である。特に、後者は、文化四年の第二陣において、番頭格の久保田家臣が、横手組下持である向帯刀の下に配置されていることをさしている。橋本は、明らかにこの編成のしかたを批判している。そして、その基底に久保田給人と在々給人を区別する意識、特に藩主直属の軍隊を構成するものとして前者を重視する意識があることは、ここではもはや疑いない。藩の体制上、両者とも藩主に対しては

直臣であることは、まぎれもない事実である。それにもかかわらず、どのようにしてかかる意識が生れてくるのか、このこと自体興味ある問題である。おそらく、すでに述べたように、藩制初頭の軍事的役割を担って在々組下給人が配置された事実と深く関わっていると思われるが、ここではまず、こうした、意識が存在したことを確認して論を進めたい。このようにみると、両者の間に軍事編成上の役割分担の存在することを前提として、文化六、同八年の軍割が行われていることは明らかだろう。ちなみに、両軍割で、それぞれの軍将は岡本又太郎・足田斎でいずれも家老、また各浮勢の大將は番頭で、先に引用した橋本の指摘どおりになっている。この点、向帯刀（横手組下持）を軍将とした文化四年の第二陣の軍割だけが例外であるが、それも実際には出兵しなかったし、その後、上記のように変化したのである。

しかし、藩はその一方で、各地に居住する所預に対し、大筒の所有状況およびその技術所持者の調査を依頼している。

（前略）

一、大筒所持に候は、可被書出候、組下給人并家人其外迎も所持之者候は、取調可被書出候

一、組下之内大筒稽古罷有候もの家督・局住共此節達者に業相成、御用に相立候面々吟味之上可被書出候

（但書略）

一、家人之内、右同断可被書出候

（但書略）

右之通御吟味之次第有之候間、塵置堅帳相認、来月二日迄可被書出候^⑤

この仰渡しは文化四年十月十二日付であり、したがって実際の出兵が終了したあとのものである。宛所は、角館をはじめとして各地の所預・組下持の人身給人すべてである。「家人」とは、それらの家臣、すなわち藩権力よりみれば陪臣にあたるが、そのようなもののなかにも人材を求めることを、藩の軍事力の状況は要請していたのである。

結びにかえて

最後に、いささか繁雑となった論点を整理し、若干の展望を述べて、結論にかえたい。まず、これまで指摘してきた点をまとめておこう。

(一) 出兵を前提とした軍割では、久保田給人を中心として構成される。在々組下給人は、動員されても補助的な位置しか占めないが、文化五年の海岸警備体制では、逆にその中心的位置を占める。このような分担の背景には、久保田給人を藩主の「御旗本」とする意識がある。

(二) 秋田藩は、出兵以後、文化五年の海岸警備をもって、幕府の海防政策の一環に組み込まれた。出兵は、それまでの風聞や巷説と異なる具体的な情報に接する機会をもたらしたが、これ以後、幕府の軍役動員というかたちで、たえず外庄の緊張下におかれることとなった。

(三) それとともに、自らを、南部・津軽両藩の「定式」勤番と区別し、「臨時」援兵の役を担うものとして位置付ける意識が成立した。

(四) 出兵を契機として、給人の給地百姓収奪の激化が懸念される状況が生じた。これは、地方知行制をとりつづけた秋田藩の藩体制の根幹に関わる危機であった。藩は、その恣意的支配の制限を試みるが、すみ

やかな家臣団の集中をはかる意味において、右のような給人の動向を、一方的に統制しきれない面があった。

(五) 出兵の可能性が相対的に低下した文化六年以降も、常時出兵を前提とした軍団を維持しなければならなかったが、それによって藩は、家臣団の緊張感を高め、権力の集中・強化をめざした。しかしながら、そこにつくりだされたものは、幕藩制に相応した典型的な軍団編成であり、とりわけ、軍政改革と呼びうるような対応は、この時期ついになかったといわねばならない。

本稿がこれまで述べてきた事柄から、事実として指摘できるのは、以上の諸点であろう。これ以降、外庄の危機が相対的に遠のくことにより、藩制の危機的な状況も一時低下するが、藩は常時、幕府の軍役動員への準備を怠ることはできず、それに関するこれまで述べてきた諸矛盾は、つねに再燃する可能性をもっていたといえよう。そうした状況の出発点をつくり出したところに、文化四年の秋田藩の松前出兵の意義があったと、一応は結論づけておくことができる。

さて、以上のことを確認したうえで、ふたつの点を展望としてつけ加えておきたい。私は、先に、「出兵」は農民に対する収奪の強化をもたらしたと述べた。あまりにも常識的な結論であるが、あくまでも藩制史研究の基本として確認しておくべきことである。しかし、それにしても、と考える。異国からの突然の訪問者は、東北の地に暮す人々に、いったい何をもたらしたのだろうか。農民収奪の強化、これは客観的事実としてまちがいない。しかし、それだけであろうか。嘉永・安政年間（一八四八～五九）、上層農民からのち郡奉行となった渡部斧松は、その上書に、

一、外国の防ぎには百姓にて可致候事^⑥といひ、

村方百姓之内六拾人江老入ニ付五石宛分知被至土着守護為至、鉄砲稽古為相励申度候間、右六拾人御足輕ニ被召立……海岸防禦之一助ニも相成候哉ト存込奉願候^{⑥7}

と書いた。階層性の問題もあろうが、ここにあらわれたある種のナショナリズム——たとえ歪んだものではあるにしても——の生成は、単純な収奪一辺倒の論理では説明できない問題であらう。わずか五〇年ほどのちにこのような意識が生れているとすれば、本稿が検討の対象とした時期においても、支配されていた人々が、幕藩制社会という枠に限定された意識以上の何かを、「外庄」を契機として得ていたとしても不思議ではない。階級矛盾の激化という視点をこえて、ぜひとも取組まなければならぬ問題である。そこにこそ、「外庄」を地域史と関連させて考察するための重要な視点がある。

第二点めは、「外庄」が、支配階級に及ぼした影響の問題である。実際に、出兵という事態を経験した人々は、そこから何を学びとったのであろうか。本稿で述べた事実による限り、そこに外庄あるいは幕府の軍役動員を強く意識した改革は、検証することができなかった。しかし、この時期において、いわゆる藩政改革と呼ぶべきものが皆無なのではない。すなわち、文政九（一八二九）年より藩は強力な姿勢で国産奨励政策に着手する。そして、それをほとんど一方的に指導したのは、文化四年の第一陣で陣場奉行として出兵した金易右衛門なのである。^{⑥8}その政策の内容は、領内各地に養蚕座を置いて蚕種紙を生産し、それを領外に移

出するといふものであり、幕府の軍役動員や外庄に対する危機意識を示す事柄は、史料の上では全く見出すことのできないものであった。しかし、出兵という非常の事態を、しかも責任ある立場でうけとめ、体験せざるをえなかった人間が、その後これまた指導者として藩政改革にあたらうとするとき、そこに外庄や幕府軍役に対する危機意識が存在しないなどということが考えられるであらうか。もとより、推測をたくましくして論をすすめることは厳にひかえなければならぬにしても、こうした視点を否定しすることはできないのではなからうか。

右に述べたことは、いずれも、「外庄」が人々にどのような新たな意識の生成をもたらしただか、という問題である。近世史研究が、基本的には文献史料に基づいてすすめられる現状である以上、右に述べたふたつの点を論証することは、現在の私には至難である。しかし、この時期以降の藩制（政）に関する研究が、「外庄」という視点をぬきにしては成り立ちえないことは、もはや明らかであらう。文化四年の松前出兵は、われわれにそのことを示している。

註

① 藤田寛「海防論と東アジア——対外危機と幕藩制国家——」（講座

日本近世史7『開国』、一九八五年、有斐閣）、菊地勇夫「外庄と『蝦夷地』支配」（『歴史学研究』一九七九年度大会報告別冊特集。

のち同氏『幕藩体制と蝦夷地』一九八四年、雄山閣）。なお、菊地氏の諸論稿においては、国家論にとどまらず、地域社会史的視点が重要な位置をしめている。

② 個別藩制史に視角を限定しているわけではないが、藩制史の立場から出兵や海防論を考察したものに、津軽藩に関する諸成果がある。例えば、長谷川成一「北方辺境藩研究序説」（『弘前大学国史研究』六八・六九合併号、のち同氏編『津軽藩の基礎的研究』一九八四年、国書刊行会）、浅倉有子「津軽藩の蝦夷地警衛——賦課方式と軍団編成に注目して——」（お茶の水大学『人間文化研究年報』第六号、一九八二年）。

③ 例えば、秋田県立図書館編『国典類抄』に収められている諸史料は、ほとんどがそのような性格のものである。

④ 本稿では、主に秋田県立図書館に所蔵されているものを引用しているが、これらについて若干の説明をしておきたい。これらの諸記録は、その記録者の立場から分類すれば（a）出兵に参加したもの、（b）参加しなかったもの、に分けられ、内容からあえて分類をするならば、（イ）部分的に藩の仰渡しや幕法を含むが、出兵の具体的な経過を中心に記録したもの、（ロ）藩の仰渡しや幕令を通して藩政の動向を記録したもの、に分けることができる。（a）は（イ）に、（b）は（ロ）にほぼ一致する。さてこれらを使用する際問題となるのは、これらの史料に引用されているものの中で、その原史料を確認できない法令等の扱いであろう。これらは、間接的であるという点で、一次史料とはいえないわけである。しかし、他の記録に引用されている場合はまず問題ないであろうし、他にみられない場合でも、それが引用されている記録史料の信頼性が、他の客観的事実によって高いと考えられる場合、加えてその引用が、例えば、「六月朔日御老中土井大炊

守様御宅へ御留守居安田慶蔵御呼出被仰渡候」というように、その発令経過が明記されている場合は一応検討の対象とすることが許されると思う。まず一次史料の確認こそとるべき方法の第一であろうが、それが早急に充分になしえない現状と、これらの諸記録が残されているという事実自体を重視する立場から、本稿では、右に述べたような限定付で検討を加えてゆきたい。

⑤ 本稿では、便宜上、出兵直後の文化五年の海岸警備体制を含めた出兵状況を「出兵」と表記し、事実上の軍隊派遣を意味する出兵と区別しておきたい。

⑥ 東山文庫「松前御加勢日記」。秋田県立図書館所蔵。同史料は、文化四年出兵の第二陣（本文に後述）に参軍した藩士の記録と思われる。警備地までの旅程、彼地での動静の記録を中心に、関連する幕令や藩仰渡しを採録。なお、本文で指摘した箱館奉行の達書は第二章で引用する。

⑦ 前掲史料。また、東山文庫「松前御加勢記」、同「箱館江御加勢被仰付候砌諸事覚」。いずれも秋田県立図書館所蔵。前者は「出兵」時の領内海岸警備の記事に詳しく記録者は出兵には参加していない。後者は第一陣に参軍した藩士の記録で、警備地での動静に詳しい。

⑧ 前掲「松前御加勢記」。

⑨ 「八丁夜話」。第二期新秋田叢書一。一五頁以降に、出兵令をうけとめた藩内の様子が詳細に述べられている。「八丁夜話」は町奉行をつとめた橋本秀実の私的日記である。

⑩ 秋田藩町触集。一四八三。（今村義孝・高橋秀夫編の未来社刊のもの）

のを使用。数値はその史料番号である。以下、同じ。

⑪⑫前掲「八丁夜話」。

⑬ 金易右衛門については、拙稿「東北における藩国益策の展開と挫折」

(北島正元編『近世の支配体制と社会構造』一九八三年) 参照のこと。

⑭ 註⑳参照。

⑮ 前掲「箱館江御加勢被仰付候御諸事覚」

⑯⑰前掲「松前御加勢日記」

⑱ 戸村文庫「松前箱館御加勢日記」。秋田県立図書館所蔵。記録者は、

向組下として参加した横手給人、上遠野子之助。久保田まで登り、帰

邑するまでの記録。

⑲⑳前掲「松前御加勢記」。

㉑㉒前掲「松前箱館御加勢第記」。

㉓ 東山文庫「異国船致来ニ付御軍馬割」。秋田県立図書館所蔵。末尾

に「田所松軒撰之」とあり、後の編纂物と考えられる。また、「嘉永

元年戊申四月十日蓋紙付直」とあることから、それが嘉永元(一八四

八)年以前であることがわかる。したがって、編纂物であるにしても、

史料としての信頼性は高い。出兵・領内海防に関する事実関係の記録・

仰渡し・隣藩からの書状等を収めて、内容は豊富である。なお、本文

引用史料については、「於江戸表、牧野備前守御渡被成候御書付之写、

御目付様御触左之通」とある。

㉔ 組下給人については、すでに戸村十大夫組が文化四年に久保田出府

を命じられていたが、その際、

右之外、角館・刈和野・角間川・拾貳所ニ而貳拾人宛心掛被仰付候、

御才次^{ママ}促次第出府致候様、組頭より被仰渡候(中略)檜山・大館ハ岩
館御境固メ被仰付、御自国之御固メ共ニ誠ニ貳百年来無之寄事ニ
御座候(前掲「松前御加勢記」)

とあり、組下持大身および組下給人の警備体制における重要性は明らかである。

㉕㉖前掲「異国船到来ニ付御軍馬割」。

㉗ 同掲「松前御加勢記」。中川飛驒守については「八丁夜話」にも記載がある。第二期新秋田叢書、三一頁参照。

㉘ 前掲「松前御加勢記」。

㉙ 前掲「八丁夜話」、「松前御加勢日記」など。

㉚㉛御触書天保集成。六五二五。

㉜ 東山文庫「文化年間海岸警備書付」。秋田県立図書館所蔵。表題に

「文化年間」とあるが、内容は、引用部分の上申書と出兵終了直後に

発布された仰渡し、および文化五年一月に作成された海岸警備体制に

ついての案よりなり、その記事は出兵直後の事項に限定されている。

本文引用史料の注記として

文化四卯年九月 九日惣評之上申上候書載控、但一統大旨左之通ニ

候得共、外ニ少々存寄之もの別紙書載差上候、小太郎・易右衛門・

文内・東馬罷出申上候

とあり、この評議の主体がわかる。「文内」は不明だが、「小太郎」

は瀬谷小太郎、「易右衛門」は金易右衛門、「東馬」は介川東馬で、

いずれも文化の出兵前後に勘定奉行に就任している。また、何らかの

かたちで、出兵・海防に関わっている(瀬谷は文化二年能代の海岸警

備にあたり、介川は文化六年の軍割で陣場奉行をつとめている。金についてはすでに述べた)。なお、同史料には「介川緑堂筆」とあるが、これは右の介川東馬である。

③③ 註② 浅倉論文。

③④ 註① 菊地論文。

③⑤ 前掲「松前御加勢日記」。「文化五年辰十二月十八日、御用番青山下野守様 御留守居御呼出ニ付、森川東兵衛罷出候処、御用人太田三郎右衛門ヲ以被相渡候御書付写」とある。

③⑥ 秋田藩町触集。一四八三。

③⑦ 前掲「松前御加勢日記」。

③⑧ 前掲「八丁夜話」一五頁。

③⑨ 同前三四頁。

④① 同前五八頁。

④② 前掲「松前御加勢日記」。

④③ 前掲「松前御加勢日記」。

④④ 秋田藩町触集。一五二一。

④⑤ 前掲「異国船到来ニ付御軍馬割」。

④⑥ 前掲「松前御加勢日記」。

④⑦ 東山文庫「松前御加勢御用留」。秋田県立図書館所蔵。

④⑧ 秋田藩町触集。一四八八。

⑤① 関家文書「万代日記帳」。秋田県雄勝郡稲川町関宇内氏所蔵。

⑤② 前掲「松前箱館御加勢日記」。

⑤③ 秋田県史・近世編上。一三五頁。

⑤④ 秋田藩町触集。一五二〇。

⑤⑤ 秋田県史・近世編上。二六七頁。

⑤⑥ 親郷・寄郷の村組織は藩制初期より存在したが、表5作成に使用した「六郷惣高村付帳」では表中、米内沢村組・浦田村組・沖田目村組の三地域が親郷役を「月行事」によるとし、一村に特定していない。しかし、「割合帳」では各グループの最初に親郷を記載していると考えられるので、その三地域の場合もトップを親郷と解釈してまちがない。

⑤⑦ 藩が、給人の恣意的収奪の統制に努め、給地百姓との矛盾の激化を抑えようとするのは、寛政期の主要な政策路線であった(拙稿「秋田藩『郡方支配』考」『秋大史学』30・31号一九八五年)。したがってそれも、出兵状況に対応して新たに与えられた改革とはいえない。

⑤⑧ 秋田藩町触集。一五〇八。

⑤⑨ 佐竹文庫「津軽御加勢心掛御備御人数御試し留書」。秋田県立図書館所蔵。

⑥① 戸村文庫「御備被仰渡候人数」。表6参照。

⑥② 佐竹文庫「御軍事人数割」。秋田県立図書館所蔵。

⑥③ 前掲「松前箱館御加勢日記」。

⑥④ 前掲「八丁夜話」。二四頁、および二九頁。

⑥⑤ 秋田藩町触集。一五〇九。

⑥⑥ 西岡虎之助『老農渡部斧松翁伝』八六頁。

⑥⑦ 渡部斧松文書「口上書」。秋田県立図書館所蔵。

⑥⑧ 註⑬ 拙稿・参照。

(秋田県立秋田南高校教諭)